

解 答

□

- 問一 ① 試算 ② 総〔じて〕 ③ 転機 ④ 帯〔びる〕 ⑤ つか〔え〕
 問二 みなす 問三 自我の芽ばえとは 問四 ウ 問五 自分が活動する領域
 問六 自己定義した私的領域から出ることを拒み、他者を恐れる「ひきこもり系」と、すべてを私的領域とし、仲間以外の人に無感覚でいる「ルーズソックス系」
 問七 その範囲の自己定義や活動領域が個々の若者によって異なり、親さえも排除した自室のみをさす極端な場合もあるように、精神的な私的空間を表すから。
 問八 イ 問九 ア 問十 エ

□

- 問一 ① 並木 ② あわ〔い〕 ③ 補助 ④ 分 ⑤ 味方
 問二 A イ B エ C オ D ア 問三 イ 問四 ア
 問五 時間も忘れて花に熱中していたが、夕方の気配に心細さと不安を感じこわくなったから。
 問六 ア
 問七 姉の怒りに驚き、おびえながらも、姉のつくった花の道しるべをこわしたと悟り、申し訳ないと思う気持ち。
 問八 ウ 問九 エ

解 説

□ 出典は、正高信男『ケータイを持ったサル』。

- 問二 □ I の直後の二文を根拠として、「ひきこもり」を「犯罪者の予備軍」と □ I ことは「全くの誤解にすぎない」と述べているので、□ I には、同じだと見る、判断を下す、という意味を表す言葉が入ります。
 問三 「思春期」をキーワードに、「思春期とは、すなわち自我の芽ばえるところである」という一文に注目します。それにつづく一文に「自我の芽ばえとは」どうすることか述べられています。
 問五 〜線 3 の直後に、「足を踏み出そうとしない」とあるので、「個々の若者」が、「縄張り」として「決定してしまう」場所の範囲についてさがします。
 問六 〜線 4 の「双方」について、筆者はこのあとの段落で、一方を「ひきこもり系」、さらにそのあとの段落で他方を「ルーズソックス系」と名づけています。「ひきこもり系とルーズソックス系の差異をあえて挙げるならば」「異邦人の棲む世界」を「恐怖とを感じるか、あるいは無感覚でいられるかという点」であると述べているので、他者に対してどういう行動をとるか、を中心にまとめます。
 問七 『「ひきこもり」と呼ばれている人々」にとっては、「自分の家のなかにすら、『家の外』と認める空間があることが少なくない」、また「もっとも極端な場合は自室のみを『家のなか』と把握し、その外へ出ることを拒む。親ですら、私的領域からは排除される」とあるので、単なる物理的な空間ではなく、精神的な空間をさすことがわかります。
 問十 〜線 6 は「軋轢」によって生じた「挫折」にどう対応するかによる分かれ目をさします。「挫折した自分」を「許せないと否定的態度を取った」場合には「ひきこもり系」に、「今までどおりやっていきましょうという態度を貫くと、ルーズソックス系に属する」と、最終段落に述べられています。

□ 出典は、佐藤多佳子『五月の道しるべ』。

- 問三 〜線 1 のあとで、「(どうしよう)」「このままにしておいたら、誰か大人がやってきて、花をつんだことを怒るかもしれない」と心配しているので、自分のしたことが悪いことだとわかっているときの心情を選びます。
 問四 ものの様子や動作をまねて、それらしく表した「擬態語」と、動物の声やものの音などを表した「擬声語」を区別します。
 問五 〜線 3 の直後に「何かに熱中していて、思いがけず時間がたってしまったことに気づくと、いつもちょっとだけこわくなる」とあります。「花の道しるべ」をつくることに熱中していて「花の色」が「寒い感じ」になり「こわくな」った気持ちを答えます。
 問六 〜線 4 の直後に、「私は自分の胸がつぶれるような思いがした」とあるので、声も出ないほどのショックを受けたことがわかります。
 問七 進は姉を見つけて「うれしそうに」しますが、姉が「おんおん泣きだし」たので「ひどくおびえた顔」になります。姉がさらに「泣きながらどな」るので、進は「花の道しるべ」と姉の顔を「見比べた」あと、「つつじの花を」「ひろい上げ」ていますから、姉のしたことと、自分のしたことを理解したことがわかります。進の様子と行動をもとに彼の心情を考えます。

問八 〜〜線6の直後に「それは、つつじでも道しるべでもなく、私のぜんぜん知らない不吉でいやなものだった」とあります。「美しい花のくさりのように」「その世で一番かわいいへびのように」「横たわっ」ていた「花の道しるべ」が今は全くちがうものに見えています。

問九 「母が進のミカタについているのがわかるので、おもしろくない」ところへ、「どのくらいたくさん」とったのかと問われ、「その質問に答えるのはむずかし」いし、答えたくない、と思っています。